



タイシャ流奥儀(巻物)の巻頭

第一回・タイシャ流と山伏体験

— 知られざる山伏の聖地を訪ねて —

平成20年7月15日(火)～16日(水)



タイシャ流「白刃」の演武



山伏問答

第1日目 7月15日(火)

鞍岡祇園神社夏季大祭に参加 タイシャ流演武と山伏体験

集合場所 祇園神社社務所 (～12:00)受付・(12:00)直会
昼食 (13:00)御神幸行列参加 (15:00)タイシャ流「白刃」
の演武 (15:30)神社⇒☞⇒馬見原ヤンボシ塚⇒☞⇒
(16:10)冠岳→徒歩→天狗山→徒歩→(17:20)冠岳⇒☞⇒
(17:30)波帰天狗神社⇒☞⇒(17:50)やまめの里 ホテルチ
ェックイン・夕食



ご神幸行列(お浜行)

鞍岡祇園神社の夏祭りには、六尺棒を持った「棒使い」が御神幸行列(お浜行)を先導し、境内では「白刃」と呼ぶ試合の型が行なわれます。鋭い気合とともに太刀を振り下ろし、三尺、六尺棒を繰り出す迫力のある演武です。

この演武は、熊本県人吉の剣豪丸目蔵人(1540～1629)開祖のタイ捨流で、山伏(修験道)によって正保2年(1645)に鞍岡に伝えられたことが奥儀(巻物)に記されています。秋祭りにも「ヤンボシ踊り」や「山伏問答」などの山伏伝承があり、地名も「ヤンボシ」、「ヤンボシ塚」や山伏の象徴とされる天狗を祀った冠岳、奥儀(巻物)をご神体とする天狗神社など、山伏を彷彿とさせるところが随所に見られます。

2001年5月に発見された「幻の滝」も山伏にちなむ伝説の地で、その西側には山伏が活動していたとみられる「ガゴが岩屋」があり、その石窟からは「寛永通宝」の古銭が発見されました。山伏は、険しい崖の上や深い谷、岩場や滝などを移動しながら自己鍛錬を行い、免疫力を高めて人知を超えた能力を得ていたといわれます。

このようにして脊梁山地一帯にも山伏が活動拠点を持ち、タイシャ流を鞍岡の地に伝えたのではないかと思います。明治政府の廃仏毀釈と修験道廃止令によって修験道は姿を消しました。今日においては、自然と共生する修験道精神は評価され、修験道の聖地「熊野古道」は世界遺産に指定されました。「タイシャ流と山伏体験」では、こうした知られざる山伏に由来する聖地を訪ねます。

参加費 お一人様15,000円(ホテル1泊2食、霧立越弁当1、神社直会奉納料、2日間ガイド料、保険料、企画料、消費税等を含む。但し飲料は含まれていません。部屋割は2名以上1室を基本とします。1人1室ご希望の場合は別途割増料が加算されますのでお問合せください。

(最小催行人員4人、最大催行人員25名)

第2日目 7月16日(水)

次の①と②のどちらかを選択、二班に分かれます。

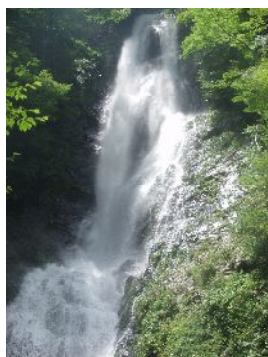
①【幻の滝班】 マイナスイオンが10万個 摩訶不思議の滝
(8:30)ホテル⇒☞⇒(9:30)木浦林道→徒歩→(10:30)幻の滝
入り口→徒歩→(11:30)幻の滝・昼食(13:00)→徒歩→(14:00)
幻の滝入り口→徒歩→(15:00)木浦林道⇒☞⇒(16:00)八村
杉・石垣村(伝建集落)見学⇒☞⇒(17:00)ホテル着・解散

※2001年5月に発見した地図にない滝。落差75mで周囲を崖に囲まれ、修験道のイメージを彷彿とさせる伝説の滝。

②【ガゴが岩屋と化石の森班】 山伏伝説の地

(8:30)ホテル⇒☞⇒(9:00)ゴボウ島→(9:30)日肥峠→(10:30)
白岩山→(12:00)ガゴが岩屋・昼食→(14:00)化石の森→
(16:30)ゴボウ島⇒☞⇒(17:00)ホテル着・解散

※ガゴが棲んでいたといわれる岩屋(岩屋から寛永通宝の古銭が発見され、ガゴとは山伏ではないかと見られている)、と同年に発見した化石の森を訪ねます。



幻の滝



二億六千万年前の化石



古銭が出土した岩屋

お申し込み・お問い合わせ

〒882-1201 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字鞍岡 4615
やまめの里内 霧立越の歴史と自然を考える会事務局
TEL 0982-83-2326 FAX 0982-83-2324
front@kiritachi.net HP: <http://www.kiritachi.net>

「丸目蔵人と心影無雙太車流」について

剣の流派を遡ってみると、古くは日南海岸の鶴戸神宮の岩屋に始まります。熊野水軍といわれる愛洲移香(1540～1629)は、鶴戸の岩屋に籠もって剣の修業をしていました。ある時、岩屋の天井から蜘蛛が糸を引いて下りてきて愛洲移香の扇に絡まりました。その蜘蛛の動きを見て愛洲移香は陰流を悟ったといわれます。今日では、鶴戸神宮を愛洲移香陰流開眼の地として、毎年2月に「剣法発祥鶴戸山頭彰剣道大会」が開催され、祭り日には大勢の剣客で賑わいます。

陰流を開眼した愛洲移香の生誕地、三重県南勢町(現在の南伊勢市)の愛洲城跡には「愛洲陰流開祖移香斎久忠」の碑が建立され、愛洲の里として一族の栄華を物語っています。また、近くの愛洲の館では、愛洲移香斎に関する資料、歴史・考古・民俗等の展示を行っており、例年8月のお盆明け最初の日曜日には「剣祖祭」が開かれ、全国から居合などの有名剣士が集まり、往時を偲んで鋭い剣捌きの演武が行われています。

上州(群馬県前橋市上泉町)の上泉伊勢守信綱(1508～1582)は、愛洲移香の陰流を基にして新しい陰流「新陰流」を確立しました。この剣法は劍禅一致、無刀取りとして刀を使わずに勝利を収める「活人剣」を目指すもので、上泉伊勢守信綱が劍聖といわれる所以はここにあります。この新陰流は全国に知れ渡り、上泉伊勢守信綱のもとに全国から武芸者が集まりました。その門弟には、後の疋田流槍術の疋田文五郎、柳生流の柳生石舟斎宗厳、宝蔵院流の宝蔵院覚院坊胤栄などがいました。丸目蔵人も門下となって新陰流を学びました。

柳生石舟斎宗厳は、新陰流から柳生流を起こし、丸目蔵人はタイ捨流を起こしました。ある時、正親町天皇(おおぎまちてんのう)の御前試合を上泉伊勢守と丸目蔵人が行いました。この時の感状に「上泉の兵法古今比類無く、天下一と言うべし」、「丸目の打ち太刀これまた天下の重宝となすべきものなり」と記されていたそうです。このようにして東の柳生、西のタイ捨といわれましたが、柳生石舟斎宗厳は徳川幕府になって江戸城の指南役となり柳生流の名声をより高めました。一方、丸目蔵人は晩年球磨郡錦町に隠遁して水田を開墾し、夜は兵法を論じて多くの門弟を育て89歳で没しました。丸目蔵人生誕地の錦町では、例年10月に「剣豪丸目蔵人頭彰 全日本選抜剣道七段選手権大会」が行われています。

鞍岡に伝承されている「心影無雙太車流」は、太刀と太刀で戦う刀術と違い、太刀に対して3尺棒、6尺棒で立ち向かう棒術です。この太車流の礼儀秘伝の演武は、古くは人吉や椎葉でも行われていたそうですが今はありません。鞍岡では、お祭りとして行われてきたことから今日まで伝えられていると思われる。その極意となる奥儀(巻物)は、鞍岡と椎葉の民家に数巻所蔵され

巻頭には、トキンを付けた天狗が鬨陣を見守り、中央に人が太刀の構えと棒の構えで対峙している絵が書かれています。次には刀と棒の図説が入り、その後は文字だけで理念や作法のような記述が続く。後半には演目とみられるものが26～27項目記載され、その後に「九州日向国肥雲働山」として○心影無雙、●太車流目録、「一能院友定」、「柏村十助殿」と続き、その後には伝尾判として免状伝授者と見られる年号と名前が列記されています。

最初に正保2年(1645)山村四兵衛(鞍岡)から始まり、元禄2年(1689)正月山村善兵衛(鞍岡)、宝永8年(1711)正月八田長右衛門(馬見原)、享保11年(1726)6月尾前権八(椎葉)、寛政12年(1800)申3月尾前甚之丞(椎葉)、寛政12年(1800)申正月尾前善吉(椎葉)、年号なしで尾前十吉(椎葉)、年号なしで尾前源左衛門(椎葉)、文化7年(1810)正月尾前庄吉(椎葉)、ここまでは全巻共通で、以後、安政2年(1855)尾前岡左衛門(椎葉)、年号なしで梅田政吉(鞍岡)で終わったもの、嘉永8年(1854)正月尾前(不詳)、年号なしで羽木村佐吉殿で終わったもの、嘉永8年(1854)正月右田市助小崎、明治19年(1886)正月那須佐善(椎葉)で終わったものなどがあります。

平成7年(1995)「太車流棒術350年と霧立越」をテーマに霧立越シンポジウムを開催、講師に熊本県球磨郡錦町のタイ捨流13代宗家の山北竹任氏及び錦町教育委員長(熊本県文化財保護指導委員)の渋谷敦氏をお招きして心影無雙太車流を調査しました。その結果、丸目蔵人のタイ捨流の基本形が入っているのでタイ捨流の流れをくむことは違いないが、奥儀に記載の一能院友定は不詳である。寛永12年(1635)に丸目蔵人の墓前で自刃した伝林坊頼慶という高弟との関係があったのではないかという結論になりました。伝林坊頼慶は、中国から渡来した山伏(修験道)であったといわれます。丸目蔵人のタイ捨流そのものが中国の武術をヒントに編み出したものともいわれています。

以上が丸目蔵人タイ捨流のルーツですが、タイ捨流の特長は、右半開から左半開へと軸足が動き、全部斜め切りで逆足が入るといいます。新陰流は禅宗ですが、タイ捨流は真言密教で試合を始める前に「摩利支天神呪教」を唱えるといっています。心影無雙太車流では唱詞はありませんが、奥儀を収めた箱から摩利支天の唱詞の文書が出てきましたので以前は唱詞があったものと思われます。陰流創始者の「愛洲移香」も摩利支天とされています。

尚、タイシャ流の文字は、丸目蔵人13代宗家によると、「タイは、体、太、対、待を現すのでタイとし、シャは待つことを捨てる自在の構えで「捨」とする」といわれました。このため丸目蔵人本家を指す場合は「タイ捨流」とし、鞍岡のタイシャ流棒術では、奥儀(巻物)に「心影無雙太車流」とあるので「太車流」の文字を用いることにしました。